

猿かに合戦

楠山正雄

青空文庫

むかし、むかし、あるところに、猿さるとかがありました。

ある日猿さるとかにはお天気てんきがいいので、連れだつて遊びあそに出ました。その途とちゆう中、山道やまみちで猿さるは柿かきの種たねを拾ひろいました。またしばらく行くと、川かわのそばでかにはおむすびを拾ひろいました。かには、

「こんないいものを拾ひろった。」

と言いつて猿さるに見みせますと、猿さるも、

「わたしだつてこんないいものを拾ひろった。」

と言いつて、柿かきの種たねを見みせました。けれど猿さるはほんとうはおむす

びがほしくってならないものですから、かに向か^むって、

「どうだ、この柿^{かき}の種^{たね}と取りかえっこをしないか。」

と言^いいました。

「でもおむすびの方^{ほう}が大きいじゃないか。」

とかには言^いいました。

「でも柿^{かき}の種^{たね}は、まけば芽^めが出て木^きになって、おいしい実^みがなる

よ。」

と猿^{さる}は言^いいました。そう言^いられるとかにも種^{たね}がほしくなって、

「それもそうだなあ。」

と言^いいながら、とうとう大きなおむすびと、小さな柿^{かき}の種^{たね}とを

取^とりかえてしまいました。猿^{さる}はうまくかにをだましておむすびを

もらうと、見せびらかしながらうまそうにむしやむしや食^たべて、

「さようなら、かにさん、ごちそうさま。」

と言^いって、のそのそ自^じ分^{ぶん}のうちへ帰^{かえ}っていきました。

二

かには柿^{かき}の種^{たね}をさつそくお庭^{にわ}にまきました。そして、

「早^{はや}く芽^めを出^だせ、柿^{かき}の種^{たね}。」

出^ださぬと、はさみでちよん切^ぎるぞ。」

と言^いいました。すると間^まもなく、かわいらしい芽^めがによきんと出^でました。

かにはその芽に向かつて毎日、

「早く木になれ、柿の芽よ。」

ならぬと、はさみでちよん切るぞ。」

と言いました。すると柿の芽はずんずんのびて、大きな木になつて、枝が出て、葉が茂つて、やがて花が咲きました。

かにはこんどはその木に向かつて毎日、

「早く実がなれ、柿の木よ。」

ならぬと、はさみでちよん切るぞ。」

と言いました。すると間もなく柿の木にはたくさん実がなつて、ずんずん赤くなりました。それを下からかには見上げて、

「うまそうだなあ。早く一つ食べてみたい。」

といつて、手をのぼしましたが、背がひくくつてとどきません。
 こんどは木の上に登ろうとしましたが、横ばいですからいくら登
 っても登つても落ちてしまいます。とうとうかにもあきらめて、
 それでも毎日、くやしそうに下からながめていました。

するとある日猿が来て、鈴なりになっている柿を見上げてよだ
 れをたらしめました。そしてこんなにりっぱな実がなるなら、おむ
 すびと取りかえつこをするのではなかったと思ひました。それを
 見てかには、

「猿さん、ながめていないで、登つて取つてくれないか。お礼に
 は柿を少し上げるよ。」

と言ひました。猿は、

「しめた。」

と言わないばかりの顔をして、

「よしよし、取って上げるから待つておいで。」

と言いなから、するする木の上に登っていきましました。そして枝と枝との間にゆっくり腰をかけて、まず一つ、うまそうな赤い柿をもいで、わざと、「どうもおいしい柿だ。」と言いいい、むしやむしや食べはじめました。かにはうらやましそうに下でながめていましたが、

「おい、おい、自分ばかり食べないで、早くここへもほうつておくれよ。」

と言いますと、猿は、「よし、よし。」と言いなから、わざと

青い柿あおかきをもいでほうり出だしました。かにはあわてて拾ひろつて食たべてみますと、それはしぶくつて口がまがりそうでした。かにかが、「これこれ、こんなしぶいのはだめだよ。もつとあまいのをおくれよ。」

と言いいますと、猿さるは「よし、よし。」と言いいながら、もつと青いのもいで、ほうりました。かにかが、

「こんどもやっぱりしぶくつてだめだ。ほんとうにあまいのをおくれよ。」

と言いいますと、猿さるはうるさそうに、

「よし、そんならこれをやる。」

と言いいながら、いちばん青い硬かたいのもいで、あおむいて待まつ

ているかにの頭あたまをめぐがけて力ちからいっぱい投げつけますと、かには、
 「あつ。」と言いったなり、ひどく甲羅こうらをうたれて、目をまわして、
 死しんでしまいました。猿さるは、「ぎまをみる。」と言いいながら、こ
 んどこそあまい柿かきを一人ひとりじめにして、おなかのやぶれるほどたく
 さん食たべて、その上り両手りょうてにかかえきれないほど持もって、あとを
 も見みずにどんどん逃にげて行いってしまいました。

猿さるが行きってしまつたあとへ、そのときちようど裏うらの小川おがわへ友ともだ
 ちと遊あそびに行いつていた子こがにが帰かえつて来きました。見みると柿かきの木の
 下したに親おやがにが甲羅こうらをくだかれて死しんでいます。子こがにはびつくり
 しておいおい泣なき出だしました。泣なきながら、「いつたいたれがこ
 んなひどいことをしたのだろう。」と思おもつてよく見みますと、さつ

きまであれほどみごとになっていた柿かきがきれいになくなって、青あおい青あおいしぶ柿がきばかりが残のこっていました。

「じやあ、猿さるのやつが殺ころして、柿かきを取とっていったのだな。」

とかにはくやしがつて、またおいおい泣なき出だしました。

するとそこへ栗くりがぽんとはねて来て、

「かにさん、かにさん、なぜ泣なくの。」

と聞ききました。子こがには、猿さるが親おやがにを殺ころしたから、かたきを討うちたいと言いいますと、栗くりは、

「にくい猿さるだ。よしよし、おじさんがかたきをとってやるから、お泣なきでない。」

と言いいました。

それでも子かには泣ないていますと、こんどは蜂はちがぶんとうなつて来きて、

「かにさん、かにさん、なぜ泣なくの。」

と聞ききました。

子かには猿さるが親おやがにを殺ころしたから、かたきを討うちたいと言いいました。すると蜂はちも、

「にくい猿さるだ。よしよし、おじさんがかたきをとつてやるから、お泣なきでない。」

と言いいました。

それでも子かにかがまだ泣ないていますと、こんどは昆布こんぶがのろのろすべつて来きて、

「かにさん、かにさん、なぜ泣くの。」

と聞ききました。

子かには猿が親がにを殺したから、かたきを討ちたいと言いました。すると昆布も、

「にくい猿だ。よしよし、おじさんがかたきをとってやるから、お泣きでない。」

と言いました。

それでも子かにながまだ泣いていますと、こんどは白がころころころがって来て、

「かにさん、かにさん、なぜ泣くの。」

と聞ききました。

子かには猿が親がにを殺したから、かたきを討ちたいと言いました。すると白も、

「にくい猿だ。よしよし、おじさんがかたきをとつてやるから、お泣きでない。」

と言いました。

子かにはこれですつかり泣きやみました。栗と蜂と昆布と白とは、みんなよつて、かたき討ちの相談をはじめました。

三

相談がやつとまとまると、白と昆布と蜂と栗は、子かにを連

れて猿さるのうちへ出かけて行きました。猿さるはたと柿かきを食たべて、おなかなかがくちくなくなつて、おなかなかこなしに山へでも遊あそびに行つたとき、え、うちにはいませんでした。

「ちようどいい。この間あいだにみんなでうちの中にかくれて待まつていよう。」

と白うすが言いいますと、みんなはさんせいして、いちばんに栗くりが、

「わたしはここにかくれよう。」

と言いつて、炉ろの灰はいの中にもぐり込みました。

「わたしはここだよ。」

と言いいながら、蜂はちは水がめの陰かげにかくれました。

「わたしはここさ。」

と、昆布こんぶは敷居しきいの上に長々ながながと寝ねそべりました。

「じゃあ、わたしはここに乗のつていよう。」

と臼うすは言いつて、かもいの上うにはい上あがりました。

夕方ゆうがた方がたになって、猿ざるはくたびれて、外そとから帰かえつて来きました。そして炬ろばたにどっかり座すわり込んで、

「ああ、のどが渴かわいた。」

と言いいながら、いきなりやかんに手てをかけますと、灰はいの中なかにか
くれていた栗くりがぼんとはね出だして、とび上あがって、猿ざるの鼻はな面づらを
力ちからまかせにけつけました。

「あつい。」

と猿ざるはさけんであわてて鼻はな面づらをおさえて、台だい所どころへかけ出だ

しました。そしてやけどをひやそうと思つて、水がめの上に顔を
出^だしますと、陰^{かげ}から蜂^{はち}がぶんととび出^だして、猿^{さる}の目の上をいやと
いうほど刺^さしました。

「いたい。」

と猿^{さる}はさげんで、またあわてておもてへ逃^にげ出^だしました。逃^にげ
出^だすひょうしに、敷^{しきい}居^いの上に寝^ねていた昆^{こん}布^ぶでつるりとすべつて、
腹^{はら}んばいに倒^{たお}れました。その上に白^{うす}が、どきりところげ落^おちて、
うんとこしよと重^{おも}しになつてしまいました。

猿^{さる}は赤^{あか}い顔^{かお}をありつたけ赤^{あか}くして苦^{くる}しがつて、うんうんうなり
ながら、手^て足^{あし}をばたばたやつていました。

そのとき、お庭^{にわ}の隅^{すみ}から子^こがにがちよろちよろはい出^だしてきて、

「親おやのかたき、覚おぼえたか。」

と言いいながら、はさみをふり上あげて、猿さるの首くびをちよきんとはさ
みではさんでしまいました。

青空文庫情報

底本：「日本の神話と十大昔話」 講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年5月10日第1刷発行

1992（平成4）年4月20日第14刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年8月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

猿かに合戦

楠山正雄

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>